

記事の挿入のお願い

3月9日発行の「社会工学科50周年記念誌」に、前田佳紀さん(1991卒、中村良夫研)から1月中に寄せられた記事「これからも。」を、編集部ミスで掲載することができませんでした。前田さんをはじめ皆さまに深くお詫び申し上げます。以下の記事ですので、記念誌のp.99に挿入し、お読みください。なお、「社会工」のホームページで紹介しました「50周年記念誌」のPDF版では、前田さんの寄稿文も追加掲載しましたので、そちらからもご覧になれます。(50周年記念誌編集担当)

これからも。

前田佳紀

(1991卒、中村良夫研)

卒業してから三十年が経とうとしている。いわゆる“バブル世代”だったので将来を楽観視する癖が身についてしまい、それがとうとう今日まで続いている。六類は、建築、土木、社工とあった。人生を心配する学生なら社工は選択しない(と思う)。そういう意味で、社工は、どれだけ明るい未来社会をプランニングし実現するか、が責務であると感じる。

私が社会に出てから様々なテクノロジーが進歩した。学生時代は携帯電話やインターネットはなかった。レポートを書く時は「知恵蔵」「現代用語の基礎知識」といった分厚い事典を使った。“超”売り手市場の就活の時は、リクルートなど数社からダンボール箱ごと資料が送られて来たので、狭いアパートの押入れがすぐにいっぱいになった(ネットで何でも情報が入手できるいまから振り返ると、昔のなんと情報の重かったことか!)

しかし、最大の変化は、computational powerの驚異的な増大だと思う(いまはAIと言ったほうがいいのかも知れない)。都市計画にも大きく影響する。例えばクルマにしてもシェアリングが進み、そのうち路面のキャパシティ以上の台数は必要なくなり、結果、駐車場も一切不要になる。自動化により道路利用は完全にコントロールされ信号が廃止される。自分でハンドルを握

るドライブはかなりお金のかかる道楽になるだろう。これらの変化は私が生きているうちに起こると思う。もしいま自分が社工の学生であったらどんな論文を書くのか?

少々空想じみた話に聞こえるかもしれないが、五十年先、百年先には、レーザ核融合発電による無尽蔵エネルギーの獲得、さらには、ヒッグス粒子確認(ノーベル賞)に端を発する“質量が発生するしくみの解明と無重力化技術”が現実のものとなっているかもしれない。そうするとビル一棟ごと簡単に動かすことができるようになる。再開発の方法がまったく別次元のものとなる。

東工大全体でみればこのような夢の技術に詳しい研究者がいるはずである。いま気がついたが、社工は六類以外の研究にももっと関心を持つべきであり、例えば、その研究/技術があと何年後くらいで実用化されるかということについて幸運にも学内の研究者にインタビューすることができるのだ。社会にもたらすインパクトについても(もしかしたら)ネット経由よりも確度の高い情報が得られるかもしれない。まちづくり/都市計画/国づくりに反映することができる。さらに意気投合して会社づくり(起業)することになるかもしれない(これはちょっと言い過ぎかも)。

generalistになれ!とよく教授から言われたことを思い出す。学科が廃止されるいま、もっと社工/東工大のネットワークを活用すべきだったことに気がついた。しかし決して遅くはないと楽観的に捉えている。本日の記念パーティーから始めたい。